

未来への伝承

第86回土浦全国花火競技大会も、10月7日に盛会のうちに幕を閉じました。

趣向をこらした数々の花火を鑑賞し楽しめる場であることはもちろんですが、「土浦の花火」は競技大会であることが最大の特徴です。花火師たちが誇りと名誉をかけて参加し、自信作の花火を打ち上げる格好の場となっています。

最高の栄誉といわれる内閣総理大臣賞は、全国で「土浦の花火」と「大曲の花火(全国花火競技大会)」の二つだけで授与されています。数々の花火大会がありますが、技術の粋を



▲写真①「木製の花火の筒」

堪能できる希少な大会といっても過言ではありません。

土浦には花火にまつわる歴史やエピソードが残されています。博物館では、それらをまとめた映像を平成13年(2001)に制作しました。地域の祭礼などで打ち上げられた花火、競技大会のあゆみ、さらに土浦生まれの屋の花火「ブドウ煙」の再現を、花火の歴史をひもときながら紹介しています。

映像の中では、中村西根に伝わる木製の花火の筒(写真①)を紹介しています。明治38年(1905)に日露戦争が終結した際、凱旋式の打ち上

映像「土浦の花火」伝統花火から

全国花火競技大会まで」

げに使われたもので、昭和63年(1988)の博物館開館時から館内に展示しています。3本ある筒の一番大きいものは1尺玉(直径約30センチ)用で、長さが4メートル32センチもあり、大きな筒を使って花火を打ち上げたことを知ることができま

す。また穴塚では、花火の筒に丸太を入れ、火薬で打ち上げる「竜星」と呼ばれる花火があり、丸太がどれだけ高く上がるかを競い合った催しをしていたといわれています。

こうした民間に伝えられてきた花火は、祭礼と一体化することで、火薬技術を伝承してきました。

花火師の技術の向上に貢献してきたのが土浦の花火競技大会です。大会の発展に尽力した北島義一(1908～1979)は、かつて市内にあった土浦火工株式会社(前身は北島煙火店)を昭和20年に設立し、各地の花火大会で華々しい成績を収め、「土浦の花火」と日本の花火技術の進展に大きく貢献しました。

土浦火工が創作した幻の名花火といわれるのが「ブドウ煙(写真②)」です。昭和28年頃から40年代頃までつ

くられた落下傘花火と呼ばれる煙籠(煙の花火)で、鮮やかな紫色の煙が特徴でした。映像では25年ぶりに再現されたブドウ煙の製造工程も記録され、様々な改良が重ねられた花火の横顔を知ることができます。

この映像は特別展「花火と土浦Ⅰ—競技大会のあゆみ」(11月13日まで)と情報ライブラリーコーナーでご覧いただけます。また3月には特別展「花火と土浦Ⅱ—祈る心、競う技」の中で大畑に伝わる「からかさ万灯」など常総地域の花火についても紹介しますので、ご期待ください。
 岡市立博物館(☎824・2928)

▼写真②「ブドウ煙」

